

れ、公的補助なども実施されている「子宮頸がん」をはじめ、女性特有のがんと産婦人科関連の疾患を取り上げ、それらの疾患を取り巻く現状や最新治療について解説・紹介する予定です。

常任理事(事業担当) 遠藤 文夫

総合生活情報紙「あれんじ」の健康・医学・医療・学術記事の執筆・監修

本年度も、熊本日日新聞社発行の総合情報紙「あれんじ」(タブロイド判一六頁三十五万部発行)の第一土曜日分の十面と十一面の見開き二頁について執筆・監修を担当いたします。昨年度と同様に、メインの記事として医学医療関連の「元気の処方箋」を八回(五、六、八、九、一一、一二、二、三月)、また、周辺の学術記事「熊遊学ツアーリズム」を四回(四、七、一〇、一月)掲載する予定です。それぞれの頁のコラム欄も、「元気の処方箋」の際の「子育て応援クリニック」と「慈愛の心医心伝心」、また「熊遊学ツアーリズム」の際の「四季の風」と「熊本まつり探訪」という構成を維持することにしています。これらのコラムの中で、女性医療人のリレーエッセイである「慈愛の心医心伝心」は従来読者からの反響が最も大きいのですが、平成二十四年度はNHKの朝の連続ドラマ「梅ちゃん先生」が放映されている関係からか、読者から寄せられる感想が特に増えているようです。また、「子育て応援クリニック」は、以前の「まいらいふ」の

小児科用の記事も含めると実に広範な内容を蓄積してきています。

なお本年度も、「あれんじ」に掲載後逐一全ての記事を「肥後医育振興会」のホームページに掲載し、どなたでも自由に読めるようにすることにしております。

常任理事(庶務担当) 山本 哲郎

第十八回日本遺伝子治療学会学術集会を終えて(成果報告書)

第十八回日本遺伝子治療学会学術集会を平成二十四年六月二十八日〜三十日の三日間、熊本市(ホテル熊本テルサ)にて開催いたしました。この学会はすでに十八年の歴史がありますが、九州で開催されるのは二回目、熊本での開催ははじめてになります。世界が遺伝子治療の研究に大きく向かう時期に、将来への希望を持って、世界に先駆けて日本遺伝子治療学会は一九九四年に設立されました。その後、遺伝子治療の臨床応用は紆余曲折をたどりましたが、この四一五年の間には、特に小児期の遺伝子難病の治療の分野で、新しい治療としての地位を確実に占めつつあります。この時期に、熊本にこの学会を招へいし、熊本大学小児科学分野で長年研究に取り組んできました難治性遺伝性疾患を中心課題として取り上げ、学術集会を開催することは意義深いものがあると考え、そのような方向性でのプログラムを組ませていただきました。

本大会では特別講演四題、教育講演三題、シンポジウム五企画、協賛セミナー

四題を行いました。これとは別に、遠藤が会長講演を行い、また金田理事長には理事長講演をお願いいたしました。本学会の現状と将来の展望を会長講演と理事長講演で会員の皆様とともに議論させていただきました。一般演題は八十八題に及び、また参加者も三〇〇名を数え、活発な学術集会になりました。

シンポジウムIは「非腫瘍性疾患における臨床試験」と題して、とくにわが国で実施あるいは計画されている臨床試験を中心に、議論いたしました。シンポジウムIIでは癌の遺伝子治療におけるトランスレーショナル研究を取り上げました。またシンポジウムIIIでは今回特に力を入れた取り組みとして細胞治療による再生医療を取り上げました。この学会で再生医療について大きく取り上げたことはこれまでありませんでした。しかし、米国、欧州におきましては遺伝子治療と細胞治療は深く結びついており、「遺伝子細胞治療」という新しい分野が発展しています。わが国においても遺伝子細胞治療の観点からの治療研究が推進されることを目指して、これを企画いたしました。慶応大学の須田教授、自治医科大学の小澤教授に司会をお願いし、オレゴン州立大学の Markus Grömppe 教授など、多彩な演者によるシンポジウムとなり大成功でした。シンポジウムIVでは遺伝性疾患を中心に取り上げました。東京大学の辻省次教授、神戸大学の戸田達史教授など、この分野の第一人者による中身の濃いシンポジウムになりました。シンポジウムVでは技術的な進歩の中から、ベクターの開発状況の最新の知見を議論いたしま

した。

一方、特別講演では米国遺伝子治療学会会長の Xandra Breakefield 教授、欧州遺伝子治療学会会長の Nathalie Carrier-Lacave 教授、二〇一四年の米国遺伝子治療学会会長予定の Harry Malach 教授、そして肝臓細胞治療の第一人者の Markus Grömppe 教授に御講演いただきました。さらに、教育講演として、神経細胞治療の岡野栄之教授、がん幹細胞の佐谷秀行教授に御講演いただきました。それぞれの講演は大変レベルが高く、会員の皆様にも十分楽しんでいただきました。とくに、欧州遺伝子治療学会はこの学術集会を機に、日本と欧州の学会の関係をさらに親密に交流していこうということが決まり、今年十月にベルサイユで行われます欧州遺伝子細胞治療学会で日欧の合同シンポジウムを開催することが既に決定しています。米国における遺伝子細胞治療学会においても同様の取り組みを進める話が進んでいきます。

このように、今回の学術集会は、従来の遺伝子治療から遺伝子細胞治療への新しい第一歩を進めることになりました。同時に海外の学会との交流もこれまでにない新しい段階に進む契機になっています。

今回、肥後医育振興会からは多大なご援助をいただきました。学術集会が大変実りあるものであり、参加した皆様からも高い評価を得ることができました。これもひとえに皆様方のご支援の賜物と深く感謝申し上げます。今回の学術集会では私たちの教室員はじめ熊本大学の若手研究者、医師、そして学生も参加して大